

《書評》

『アフリカの価値観——無文字社会の伝統思想と日本の教育』

細見眞也著（お茶の水書房，1990年）

原 口 武 彦

はじめに

故細見眞也教授の40余年にわたるアフリカ研究の成果のなかで、本書は細見氏の専門である西アフリカに生起する事象の分析そのものではなく、方法論的問題に真正面から取り組んだ作品であるという点で異色であるが、細見氏の研究に対する基本的な考え方が提示されているという意味で細見氏の代表的作品の一つと位置づけられよう。しかし私を含めて日本のアフリカ研究者によって本書が取り上げられ、本格的に検討されたことは私が知る限りこれまでになかった。まさに遅きに失した感があるが、志なかばで急死された細見氏に対する追悼の意をこめていささか難解な本書に挑戦を試みたい。

1990年に公刊された本書は「最近8年間ほどのあいだに、雑誌論文として執筆した」（「あとがき」p.224）それぞれ独立した4つの論文の4章からなっている。しかし「独立した論文として読者の理解を得るには何かしら不十分であり」、「敢えて雑誌に掲載することにこだわらず」（したがって4つの論文はいずれもそれまで未刊であったと思われる）、「これらの論文を一つにまとめたものとして発表する機会を探していたところ、幸いにお茶の水書房の橋本盛作氏から出版を快諾していただけること」（同上）になり本書は日の目をみることになった。各論文の執筆時期は個別には明記されていないが、いずれも

英国留学後の細見氏の問題関心に貫かれた一連の研究成果であり、著者細見氏が期待した「それなりに全体として一つの筋」（同上）の通った作品となっている。

1. 問題意識

第1章「問題意識について」は細見氏がアジア経済研究所の海外調査員として1982年4月からの2年間、イギリスのロンドン大学英連邦研究所に滞在したときの経験から説き起こしている。イギリスでさまざまな研究会に出席し、研究者たちと議論を交わす過程で、「西アフリカの経済発展と英系企業」という自分の研究テーマが「必ずしも明確な問題意識に基づくものでなかったことを改めて悟らされた」（p.5）という。そして「問題意識とは、何よりもまず、われわれ研究者自身が解明すべき自分にとっての問題として意識しているものである」（同上）という。ここまではきわめて常識的な論の運びである。しかしこのあと細見氏の問題意識論はさらにその意識を支えているものは何かという深層心理の解明という意外な方向に向かう。

細見氏によれば「この問題意識というものは言葉の上ではたしかに意識と表現されているが、その実体は、われわれ人間が無意識のうちに行使する価値判断のための【基準】や【尺度】ないし【価値観】を《障害》として意識すること」（同上）であるという。問題

意識とは自分に問題として意識されているものそれ自体ではなく、それを支えている、私たちが無意識のうちに行使している価値観であり、しかもそれは常に障害として意識されるものであるというわけである。そして「……ことさら意識することもなく無意識に行使してきたという意味で、われわれにとって常識化されていた【価値観】や【思想】に対する《疑問》こそが問題意識なのであり、それは、《常識を疑う》とか《常識が問われる》ことである」(p.6)と独特の定義づけがなされる。さらに「……われわれが《常識を疑う》ことの重要性は、自らの固有な【価値観】または【思想】を意識化するためにだけあるのではなく、それらの【価値観】や【思想】を言語によって意識的に表現する過程においてはじめて、自らの【価値観】や【思想】に内在する固有性と【言語】に内在する抽象性を意識することができる、という点にある」(p.7)という。

かくして自分の問題意識の「不鮮明さ」、
「曖昧さ」を自覚した細見氏はどうしたかといえ、
「当面の研究対象であるイギリス系企業の経営者が常識としていた【価値観】や【人間観】を議論の対象にすることによって自らの問題意識を明確に意識することができるのではないか」(p.9)と期待してまず手始めにそれを試みている。具体的な事例の一つとして19世紀末、イギリス人行政官たちが本国に書き送った現地の土地保有に関する報告書に登場する「森林および荒蕪地」という範疇を取り上げ、「土地を《耕地》とか《荒蕪地》などといったカテゴリーに分類することは、焼畑農業を『体系的土地利用方式』という《実態》としては理解していなかったことを意味している」(p.37)と断罪する。これは細見氏自身が昔、ガーナでココア畑を「ただの《雑木林》と見誤ってしまった経験」(同上)に符合するものであると述懐しているが、自分の問題意識の不鮮明さの

解消の具体的営為としてはそれほど説得力は感じられない。そしてそれによって細見氏自身の常識的な意味での問題意識そのものはどうなってしまったのかが気になる。

2. 矢内原著批判

第2弾としては細見氏にとってもっと身近な存在であり、日本のアフリカ研究の草分け的存在でもある矢内原勝氏の代表的著作『アフリカの経済とその発展』(文真堂、1980年)が取り上げられる。第II章「資料批判としての書評」は文字どおり上記の矢内原著の書評である。「研究者の【価値観】とか【人間観】などという研究の【前提】を公開の場において《議論しない》のがわが国における学界の《常識》である」(p.53)ことに不満に感じていた細見氏にとってこの書評はそのような状況を打破するための一つの実践であり、同業者の当たり障りのない通り一遍の書評ではない。「著者(矢内原氏)の指名によって書評を引き受けることになった」(p.62)この書を読み進めていく過程で細見氏は「……さまざまの疑問や問題に当り、そのため、この書評を断念すべきか否かの決断に迫られたことも再三であった」(同上)。しかしそれにもかかわらずこの書を読了し、書評を完成することができたのは「本書の内容を吟味、検討しながら読みすすんでゆくうちに、それが、なにより自分自身にとってきわめて有意義なことであり、深い喜びを感じることができた……」(同上)からであるという。そして細見氏はこの書評に「ほぼ四ヶ月ものあいだ……没頭」(同上)している。

最初に俎上に載せるのは、矢内原氏が「はしがき」で自著に「アフリカ全体にわたる総合的記述と統計はあげられていない」のは、「アフリカの巨視的統計の信頼度に私が疑いをもっている」(矢内原著 p.ii)からであるとしている点である。このように主張するた

めには「多くの読者をして納得せしめるに必要な、具体的で明確な論拠を提示する責任を伴う」(p.68)はずだが、それが無いがしろにされていると細見氏は批判する。矢内原氏は「これは多少とも現地を知っているものにとっては常識である」(矢内原著、同上)とし、「犬飼一郎氏の、ケニア政府のStatistical Abstractに記載されているトラック台数が、地方の農業担当官のカンによる推計数を基礎としている、という指摘」(同上)を紹介しているのであるが、もちろんそれは細見氏を満足させるものではない。細見氏の批判はこの段階で終わらない。アフリカの巨視的統計を利用しないとしておきながらこの書には国連本部や日本輸出入銀行調査部が作成した「アフリカ全体にわたる統計」が散見されるからである。この矛盾はなぜ起きたのか。矢内原氏は「《アフリカ全体にわたる巨視的統計》であるかどうかを【基準】にしたのではなく、それらの統計資料がアフリカ人とかアフリカ諸国政府などの名において作成されたり刊行されたものか否か、などというきわめて形式的で表面的なことだけを【尺度】にして、それらの資料の信頼度を判定してきた」(p.72)ためであろうと細見氏は推察する。そしてそこに細見氏は矢内原氏のアフリカ人に対する不信感を嗅ぎ分ける。しかし矢内原氏は25年を超える年月をアフリカ研究に捧げてきた研究者であるから「終始一貫して、アフリカの人々に対する意識としての不信感を持ってきたのではなく、本書をとりまとめるために、さまざまな統計資料を取捨選択する過程において、……明白に意識されるようになったのではないか」(p.78)と細見氏は推論する。いずれにしろ矢内原氏の「アフリカの巨視的統計の信頼度に私が疑いをもっている」という言葉にこれほど執拗にせまる細見氏のこだわりは驚異的である。おそらくこの問題を細見氏に気づかせた背景には、細見氏が1971年8月から3年間、エチオピ

アのアジス・アベバに本部を置き、「アフリカ全体にわたる統計資料」を作成している国連アフリカ経済委員会に出向し、そこで統計作成に携わる職員の姿を目の当たりに見てきたという経験があったのであろう。

次に細見氏が槍玉にあげているのは、この書に提示されている数々の統計図表である。それらには「《調査時期》または《調査年次》の欠落した図表が少なくない」(p.78)という。確かに細見氏が具体的に取り出している7つの図表には調査年次が図表上には記載されていない。しかし細見氏自身も認めているようにそのうち2つは調査年次を示しようのない「著者が作成した『モデル表示』である」(p.79)し、その他についていえば原資料をたどり、あるいは矢内原氏の記述を見れば調査時期は容易に推察できる。ところが細見氏は「調査時期や年次、あるいは調査地域などを具体的に明記しないまま提示される『モデル』とか図表などが、アフリカの経済変動や経済発展などと呼ばれる『動態』を説明するのに有効であるとは考えることができない」(同上)として、これをもって強引に矢内原氏の「歴史感覚の欠如」の証左と決め付けてしまう。その結論は正しいとしても、そこに至る論証の手続きが不足しているように私には思える。

第2に取り上げられるのは矢内原氏の原典理解の問題である。「本書において使用されている図表のなかには、必ずしも原典を正確に理解しないまま引用されているものがある」(同上)として例示されている図表の1つは矢内原著の「第Ⅲ-10表 クマシ市地域・出身国、出生国、性別人口(1960年)」である。同表によればクマシ市在住のナイジェリア人のうちガーナ生まれは1万127人で、外国生まれは9006人となっている。この2つの数値を「きわめて《近似》した数値だと言うことはできるにしても、それを(矢内原の言うように)《ほぼ同数》などといっ

てしまうのは、あまりにも大胆に過ぎる」(p.80)と細見氏は断罪している。私には細見氏の断罪のほうが、「大胆に過ぎる」ように思える。さらに細見の追及は続く。同じ表のオート・ヴォルタ人について、ガーナ生まれが4142人であり、外国生まれ6381人であるのに矢内原氏が「外国生まれが3分の1」としていることを槍玉に挙げている。計算上、細見氏の指摘は正しい。しかしこれは矢内原氏の誤記あるいはミスプリントとみるのが妥当であり、また事実が3分の2であったとしても、それによってガーナ生まれの人口が過半を占めるナイジェリア人に比べてオート・ヴォルタ人の「定着の歴史が浅い」とする矢内原氏の主張は逆転されることはない。また「第Ⅲ-13表 ガーナ内モシ族主要職業別配分(1960年)」にもとづいて矢内原氏がモシ人の「男子の68%が農業に従事している」としているが、実際に計算してみると66.9%であるという。これも細見氏の指摘は正しいが、その矢内原氏の誤りは「農業従事者」の合計を3万7760人とすべきところをなぜか誤って620人多く「3万8380人」(矢内原著, p.115)としていることから生じているのである。この割り算の誤りを指摘する細見氏自身も実数については3万7760人を3万760人と誤記している。

細見氏が批判する第3点は「欧米の研究者が行ったアフリカに関する特定の事実認識とか価値判断などという研究の《結論》に相当する部分だけを、あたかもそれが、著者自身の結論とまったく同一ものであるかのような態度をもって引用している」(p.84)ことである。その事例としては3つ挙げられている。第②例は独立後の政府のアフリカ人産業育成政策についての矢内原氏の記述である。「この種の主要な政府・開発計画の結果はすべてよくなかった」(矢内原著 p.250)という記述を取り上げ、矢内原氏が依拠しているP. Kilby氏の原典の「《結論部分》だけを、ほ

とんどそのまま借用し、そのような判断がいかなる資料とかデータに基づいて行われたのかなどという点については、いささかの疑問や関心さえも示されていない」(pp.83~84)のであり、これは「第三者の研究成果を自分がそれを利用するのに《便利》で《都合がよい》資料や材料であるとしか認識していないことを示している」(p.84)と細見氏は糾弾する。細見氏のこの指摘には私も同意できる。

さらに批判の第4点として、矢内原氏が「……第三者の研究成果を文字通り《安易》に利用しようとしたため、著者の説明には以下に指摘するようなさまざまの矛盾が生じた」(p.86)として、その事例を4つ挙げている。その一つ一つの具体的論拠を示さない(それこそ細見氏の忌み嫌うことであろうが)で、私自身の検討の結果だけを提示するならば、最後の事例④のモシ族のガーナ流入に関して移入民と出稼ぎ人という範疇を峻別すべきであるという細見氏の指摘だけは建設的な意味があるが、事例①, ②, ③の細見氏の主張は十分説得的ではなく、レフリー的に判定すればどっちもどっちといったところである。

以上が細見氏の矢内原著批判の内容のあらましである。矢内原氏は本書の「はしがき」で述べている。「本書のような専門書を読む人は、著者と出版社編集部の人と、たまたま学問的興味が一致した人と、気まぐれな人の計4人ぐらいしか期待できそうにない」(p. iii)。矢内原氏が細見氏を「学問的興味が一致した人」に位置づけるにしても、書評のためとはいえ4ヶ月も没頭し、これほど丹念に読む読者が出現しようとは矢内原氏も想定できなかったであろう。細見氏がこの書評で発揮した微に入り細を穿つこの執拗さは何に由来するのだろうか。とにかく細見氏はこの書評によって「研究者の【価値観】とか【人間観】などという研究の【前提】を公開の場において《議論しない》」(p.53)日本の学界の常識に一石を投げようとしたことは確かであ

る。その第一弾として同じ西アフリカを研究対象とする先達であり、細見氏にとっては、共著（『ココア経済：輸出経済国の経済発展——ガーナを例として——』日本国際問題研究所、1969年）を著したこともあるごく身近な存在である矢内原氏が標的となったわけである。

3. 無文字社会の価値観

第III章「無文字社会の価値観と日本の教育」は対象こそ違いいずれも細見氏の批判が同じ調子で展開される。この章ではアフリカの無文字社会に照らして文字偏重の日本の教育を支える言語観、人間観が批判されている。しかしその際、参照される「無文字社会の価値観」については細見氏がガーナ北部の一寒村での経験（その村の語り部との出会い）がわずかに触れられているだけである。そして「日本の知識人の言語観」の代表例としては福沢諭吉の『世界国盡』にはじまり、「教育問題研究会」がとりまとめた『教育改革の原則——どこをどう変えればよいのか』（岩波ブックレット No.96）、大塚久雄氏の湯川秀樹氏との「対談」での発言、中根千枝氏の『タテ社会の人間関係』、川田順造氏の『無文字社会の歴史』にまで及ぶ。それらに対する細見氏の批判点は「文字の優越性に対する妄信」（p.118）であり、「既存の価値判断に対する盲従」と「自らの実感的経験という事実に対する軽視」（p.135）であり、さらには「人間否定の思想」である。しかし細見氏は孤立して戦いを挑んでいるのではなく、自分の援軍としては丸山真男、中野好夫、森有正、内田義彦、色川大吉、遠山啓、さらには欧米からもE.T. ホール、W. コーディル、W. ハイゼンベルク、G. ベイトソンと内外の錚々たる著述家たちが動員されている。

第IV章ではガーナにおける識字教育の問題が取り上げられているが、ここではガーナの

無文字社会に対してそれを推進する「政策担当者や教師をはじめとするガーナの知識人のあいだにみられる【言語認識】または【言語観】」（P.216）が細見氏の批判の対象である。そしてそのような誤った言語観に基づく「こうした教育政策がガーナ国民のあいだに《人間否定の思想》を植え付け、抽象的な言葉や《文字》に対して盲目的に従属しやすい『権力者にとって好都合な国民』をつくりだすのに成功しつつある」（同上）という。しかしガーナの教育が細見氏が指摘しているような状況にあることを具体的に示す証拠として提示されているのは細見氏自身の現地での見聞ではなく、「ガーナの沿岸都市ケープコーストの高校で1982年から84年まで日本の海外青年協力隊の一員として教鞭を」（P.216）とっていた大久保久俊氏の著書『ガーナ噴射：ケープコーストの聖と性と生徒』（情報センター出版局、1985年）の記述である。そして抽象的な水準で自説の援護に引用されているのはH.J. ラスキの言説である。

4. 瑣末主義的方法

以上、細見著の内容を、第II章を中心に若干のコメントを付け加えながらかいつまんで紹介した。細見氏が期待したであろうように本書は「研究者の【価値観】や【人間観】などという研究の【前提】を公の場で《議論しない》」（p.53）という日本の学界の常識に一矢を報いることができたといえるのだろうか。細見氏の並々ならぬ意欲と努力には敬意を表すが、結果的に本書はその企図に成功したとは言いがたい。私はその理由として以下の4点を指摘したい。

第1には本書は方法論的問題を扱っていないし、彼のアフリカ滞在の経験があまり生かされていないことが挙げられる。本書の扉には3枚の写真（細見氏が1963年1月に訪問したというガーナ北部のナガ村で村長夫妻

や村人たちと細見氏が並んだ記念撮影写真、その村の歴史を語る語り部の姿、細見氏が雑木林と見誤ったというココア畑)で飾られているが、本書の内容には細見氏のガーナ滞在時の具体的経験、それから導き出されたものがあまり多く語られていない。細見氏が出会った村の語り部のそれはそれこそ抽象的に無文字社会の象徴として紹介されているにすぎない。細見氏が現代日本の様相を批判するための武器となるはずの「アフリカの伝統思想」とは結局その無文字性、共同体性ということに帰する。

第2にこの書評での引用文からも知られるように、本書の文章には引用文を示す「」括弧とは別に【】括弧、《》括弧が頻用されていることである。なにはともあれ読者にとっては煩雑すぎる。繰り返し【】括弧に括られて登場する価値観、尺度、基準、問題、思想、前提、言語、人間観、などの語は私が理解する限り、きわめて常識的な意味合いで用いられているのであり、細見氏独自の意味合いが込められているわけではない。括弧を無視して読んでもそれほど支障がないばかりか読みやすくなる。括弧というのはそれこそ文字文化の象徴ともいえる符号であり、語りには使用できない。文字文化をアフリカの無文字文化、口承文化に照らして相対化しようとする細見氏がなぜこれほど自己表現のために括弧を多用しなければならなかったのか。おそらく自覚的にはそれは読者にその語を注視させるための強調の手段であったのだろう。本書の内容を講演する場合、これらの括弧を表現しようとするれば、語気の強弱にたよるか、一語一語に「私が言うところの」とか、前置きを付け加える以外にない。【】括弧と《》の違いは強調の差と理解できる。しかし読者の私には細見氏が独りよがり力んでいるとしか感じとれない。さらにいえば本書において括弧に括られて登場するさまざまな語句は細見氏自身が「自らの【価値観】

や【思想】に内在する固有性と【言語】に内在する抽象性を意識」(p.7)した結果の産物であり、それらの語句はまだ細見氏の言語になりきっていないのかもしれない。つまり括弧は「いわゆる」の意味を蔵していたのかもしれない。いずれにしろ表現手段としては有効でなく、何度も繰り返し用いられることによってそれらは括弧内の語の単なる変形的表現に墮してしまっている。

第3に指摘したい点は細見氏が相手を批判する際に孤立して戦わず、数多くの援軍を動員していることである。一高校生の新聞の投書からはじまって内外の著名著述家たちの引用は細見氏の目配りの広さを示し、驚嘆させられる。批判の対象とされるものについてはそれこそその片言隻語が取沙汰されるが、援軍の引用文の扱いは丁重である。それらには傾聴に値するものも少なくない。しかしそれらは細見氏の主張を飾り、補強するのには役立っているかもしれないが、肝心の細見氏の独自性を際立たせるには逆効果である。そのことを象徴しているのが、細見氏の「あとがき」である。細見氏は山口昌男の著書から「他者を媒介として己を量りなおす」という一句の引用をもってこの意欲作であるはずの本書を締めくくっているのである。細見氏が原理的に主張していることだが、なぜすべての著述家に対しては批判意識をもたないのか、そのことが気になる。

第4に細見氏が自覚的に採用している瑣末主義的方法についてである。矢内原著批判に典型的な例が示されているように、細見氏は驚くべき執拗さをもって多くの文献を徹底的に細を穿って検討している。その方法自体は評価に値する。しかしそこで発見した瑕疵についての評価、それから引き出される一般的、あるいは抽象化された結論は性急で説得性に欠ける。すでに指摘したように、たとえば矢内原著に掲げられた図表に調査時期が明記されていないことから、それだけで矢内原氏の

歴史感覚の欠如を云々するのは性急すぎる。総じて細見氏のいう具体的、個別的経験と抽象的な水準で語られる細見氏の言説はうまくかみ合っていないように思えるのである。

おわりに

矢内原著に対する細見氏のそれには及ばないが、以上が本書をそれなりに精読しての私の率直な感想である。本書が公刊された当時、細見氏が期待したであろうような反響は起きなかった。細見氏の批判する「研究者の【価値観】とか【人間観】などという研究の【前提】を公開の場において《議論しない》」(p. 53) 日本の学界の状況の変革に一石を投じることに成功しなかった。しかしそんなことで怯む細見氏ではない。本書の公刊以降、同じ路線の営為は2000年代を迎えても続行される。日本アフリカ学会の学術大会でも、「アフリカ研究の今日的意義について考える」(2002年)、「異文化の存在意義——アフリカ研究の原点とは何か？」(2003年)、「なぜ、われわれの研究は独善的になりやすいのか？日本のアフリカ研究に見る暗黙の前提を検討する」(2004年)という表題のもとに細見氏は研究発表を行っている。その表題だけを見てもわかるとおり、細見氏が考究し論じている問題は、本書で展開されたものとかかわらず終始一貫、研究者が「暗黙の前提」としてのことへの問いかけであった。この細見氏の執拗なまでの追求の集大成は今となって振り返ってみれば、2003年11月、北海学園大学を会場として開催された「アフリカ文化研究フォーラム」ではなかったろうか。北海学園大学で細見氏が主宰する自主ゼミ「アフリカ研究会」が主催したこの会には全国から私を含め8名のアフリカ研究者^(註1)が招聘され、

(註1) 「アフリカ文化研究フォーラム」に参集したアフリカ研究者は、私のほか以下の7氏であった。

また地元の市民・学生も参加した。午前10時、日本のアフリカ研究の草分け的存在である北海道大学の富川盛道氏(当時)のもとでアフリカ研究に誘われた和田正平氏(甲子園大学)が日本のアフリカ研究の歴史を回顧する基調報告でこのフォーラムは幕をあげた。それに引き続き「私たちにとってアフリカ文化を学び教育する今日的意義とは何か？」というテーマのもとに、出席したアフリカ研究者たちに地元一般参加者も加わって白熱した議論が延々、午後7時まで続けられた。司会の細見氏はさながら検事のごとく居並ぶアフリカ研究者一人ひとりに各自の研究姿勢を問いただし続けた。他者に問いただすことによって細見氏も自問自答していたのであろう^(註2)。

本書の扉には「本書をアジア経済研究所創立者故東畑精一先生に捧げる」という献詞が記されている。東畑精一氏は、細見氏が北海学園大学の教壇に立つまでの35年間、勤務していたアジア経済研究所の初代所長であったというだけでなく、農業経済学の先学としても細見氏は私淑していた。東畑氏の死去後、細見氏は毎年、墓参を欠かさなかった。そのアジア経済研究所時代、細見氏は私と同じ研究室で机を並べていた時期がある。細見氏は幼いころの思い出を語ってくれたことがあった。舞鶴の生家の近くに田んぼに水を引くための堤があった。ある日、幼い細見氏はその堤から放出される水の流れをかがみこんでじっと見つめていたのだそうだ。そしてしばらくじっと覗き込んでいるうちに細見氏は

茨木透(鳥取大学)、高林敏之(四国学院大学)、千代浦昌道(獨協大学)、藤井宏志(安田女子大学)、牧野久美子(アジア経済研究所)、森川純(酪農学園大学)、和田正平(甲子園大学)。

(註2) この「アフリカ文化研究フォーラム」の模様については、下記を参照されたい。

原口武彦 「札幌ミニ・アフリカ学会」(『月刊アフリカ』2003年12月号)

水の流に吸い込まれるように溝の中に落ちてしまったという。本書の中、およびその後の研究活動で「研究とは何か」という問いに対して細見氏が発揮した飽くことなき執着心に私はいまさらながら驚嘆するとともに、こ

の話を思い出すのである。

細見氏は研究室で論文執筆中に倒れられたと聞く。おそらく自分が天国に召されたことも気づかずに、細見氏はあの世でも飽くことなく沈思黙考を続けているに違いない。合掌。